

【シンポジウム「価値の『真正』性をめぐる諸問題—『善』・『美』・『身体』から考える」提題】

創造的表現と真正性の条件としての 身体の本性

—現象学の〈本物〉と〈本物〉の現象学—

杉本 隆久

はじめに

真正性 (authenticité)、即ち「本物」が問題とされる時、それがいかなる議論であっても、そこには共通の思考様式を認めることができるように思われる。例えば、あるハンドバッグが某ブランドの「本物のバッグ (真作)」であるかどうかの問題となるとき、問われているのはそのバッグが事実として「本物であるか／偽物であるか」であるということに異論を唱える者はあるまい。また、そのバッグが「本物」であるならば、「偽物」のバッグより価値が高いということにも異論の余地はないだろう。こうした思考様式は、なにもモノにだけ適用されるわけではない。「善」、例えば「今行った私の行為は道徳的に善い行いなのかどうか」が問題とされる場合も同様である。ここでは「〈本物の〉善い行いなのか／〈偽物の〉善い行いなのか」が問題とされているのである。或いは、「美」を問題とする場合も同様であろう。物体であれ振る舞いであれ、それが「美かどうか」を問題とする際には、「〈本物の〉美しさなのか／〈偽物の〉美しさなのか」が問題とされているのである。

この意味で「本物」を問題とするこうした思考には、対象が何であれ「真／偽」という共通の図式を認めることができる。また、この図式には(とりわけバックの例から容易に理解できるように)三つの秩序を見出すことも可能であろう。その秩序とは、(客観主義的)存在論的、価値論的、発生論的秩序である。(客観主義的)存在論的秩序とは、事実として「本物」である「もの・こと」を〈優位〉とし、「偽物」を〈劣位〉とする秩序である。価値論的秩序とは、価値として「本物」である「もの・こと」を〈優位〉とし、「偽

物)を〈劣位〉とする秩序である。発生論的秩序(1)とは、時間的発生の「優/劣」の問題であり、時間的に先立っていれば〈優位〉、後であるならば〈劣位〉とする秩序である(2)。従って、真正性の議論においては、対象の「真/偽」と「優/劣」が問題とされているといえよう。真正性を巡る議論は、常に階層秩序的な二項対立図式を前提とする。そして真正性とは、そうした図式のもとで二者択一的に決せられた「真」かつ(三つの秩序における)「優」なのである。

しかし、真正性をこうした(極めて常識的な)二項対立的な思考様式で捉えることは(本当に)可能なのであろうか。階層秩序的な二項対立的思考様式が、「真/偽」及び「優/劣」の相互外在的な——「それとは異なる」という——区別・比較の可能性をア・プリオリに前提し、そうした可能性のもとで区別・比較を行う思考様式であるならば、それは常に真正性を外延量へと還元し、「偽」や「劣」との程度の差において捉えることになるだろう。つまり、本物は偽物と三つの秩序において隔絶し異なっているとしても、その隔絶と差異はそれ自体の本性によって区別されるような実在的な区別ではなく、単なる名目上の区別であり、そこにはどんぐりの背比べにも等しい違いしかないと言わなければならないだろう。それ故、二項対立的思考様式においては、本物と偽物に大した差などなく、その区別は日常生活の便宜を計らう程度の意味しか有していないと言わなければならない。真と偽とは異なるものであるにもかかわらず、外的に比較・区別可能であるという限りにおいて同じ水準に位置し、その限りで同水準内における程度の差ほどの違いしかない。二項対立的思考様式に従った比較ないし区別とは、いわば同じものにおける違いでしかないのである。従って、こうした思考様式において真正性を捉えることは、大した問題でない。少なくとも比較可能性を前提にすることなく真正性を肯定することができないのであるならば、それ自体として真正性を捉えることは、常に不可能であるといわなければならないだろう(3)。

だが、フランスの哲学者メルロ=ポンティ(M.Merleau-Ponty,1908-1961)は、「真正性を巡る諸問題」を以上のように考えなかった。彼は名目的区別としての階層秩序的な二項対立図式に基づいて真正性の問題を考えるのではなく、実在的な区別としての現実的な身体の本性的差異という観点から〈真正

性)の問題を「記述＝表現」した。彼は、常識とは別様に思考することで〈真正性〉を〈表現〉することができると考えた。では、メルロ＝ポンティによって表現された〈真正性〉とは、いかなるものであろうか。

1、創造的表現と現実的経験 ——「条件」と「条件づけられるもの」の円環性

ところで、先の思考様式における発生論的な秩序に注目すれば、バッグの例で見たように、常に本物は偽物に先立つといわなければならない。だが、「善い行為」や「美しい演奏」等の場合はどうだろうか。この場合はバッグの「オリジナル/コピー」のように、常に本物が偽物に先行するとはいえないのではないか。発展と蓄積の歴史的過程において、人間は啓蒙されることによるのみ漸近的に「善さ」へと接近していけると考えるならば、むしろ「真」や「優」は発生論的に後であるといえるかもしれない。だが、経験的な発生はともあれ、超越論的道德律のような規範(4)がア・プリオリに先立っているからこそ、私たちはア・ポステリオリな行為の「善/悪」をその規範に照らし合わせて判断することも可能となる。ならば、やはり「善い行為」や「美しい演奏」の場合においても、発生論的に先立っていることになる。

こうした発生論的な秩序は、例えば言葉や絵にも適用することができよう(5)。まず、バッグの例と同様、「正しい言葉使い」や「フェルメールの絵」は、後続する「ら抜き言葉」や「贋作」よりも発生論的に「真」かつ「優」であるといえる(6)。また規範の先行性と同様、話し手の思考や意味は言葉に、作家のモチーフやコンセプトは作品としての絵画に先立つ。それ故、思考や意味、モチーフやコンセプトは言葉と絵に対して発生論的に「真」かつ「優」であるといえる。だが、メルロ＝ポンティはこうした発生論的な「真」かつ「優」に抗して、言葉は先行する思考や意味を前提とするのではなく、これらを実現——現実化——するのだと記述する。「思考が自分のものとなるのは表現によってである。私たちは対象を認識した後に、対象の名前を呼ぶのではない。対象の名前を呼ぶことは認識そのものである」(PP.207)。つまり、思考は言葉の外部に先在するのでも、言葉に先立って主観性の内部に用意されているのでもない。私たちは言葉に先立つ内面的な生があるという幻想に

囚われ、「思考が表現される以前にそれ自体で存在する」(PP.213)かのように思い違いをしがちである。だが、「話し手は語る前に考えるのではない。語る間に考えるのでさえない。語るということが考えることなのである」(PP.209)。

話し手だけではない。絵画という芸術作品を生み出す芸術家も同様である。芸術家は先行するモチーフやコンセプトを前提にするのではない。「芸術家が語ろうとしているものの意味はどこにもない」(SN.25)。「バルザックやゼザンヌが考える芸術家は、……そもそものはじめから文化を引き受け、それを新たに築きあげる。最初の間が語ったかのように語り、かつて誰一人描いたことのないかのように描くのである。その場合、表現とはすでに明白になっている思考の翻訳ではありえない。なぜなら、明白な思考とは私たちの中で、或いは他の人々によって、既に語られた思考であるからだ。「コンセプト(構想)」が「実行」に先立つことはできない。表現以前にあるのは、漠然とした熱気だけなのであって、創り上げられ理解された作品だけが、私たちがそこに無というよりもむしろ何ものかを見出すべきであることを証明することになるだろう」(SN.24-25)。

メルロ=ポンティは、話し手や芸術家のこうした表現を「創造的表現」(expression créatrice)という。それは経験的に先行するオリジナルのコピー(7)でも、超越論的に先在する思考や概念の適用でもない。創造的表現によって「表現されたもの」は、コピーでも適用でもないが故に、創造的であるといわれるのである。だが、創造的表現は、無から何かを生み出し、それ以上遡行できないような第一原因(8)としての「神による創造」にも比すべき創造であるが故に創造的であると言われるわけではない(9)。確かに、「最初の間が語ったかのように語り、かつて誰一人描いたことのないかのように描く」が、こうした創造的営為は発生論的な秩序の中で「真」と「優」の地位を獲得するわけではない(10)。「神による創造」は人間の製作をすべて模倣の地位に貶めるが、こうした思考自体がそもそも「オリジナル/コピー」という階層秩序的な二項対立的思考様式の母体ともいえるべき原初形態なのであり、「オリジナル(真かつ優)→コピー(偽かつ劣)」といった一方向的な関係のみを構築する発生論的秩序を基礎づけているのである。それ故、冒頭で確認した真正性を巡るあらゆる常識的な議論およびそれを支える思考様式は、すべて水平因果系列を構成する「神による創造」モデルの劣化コピーであり、

こうした思考様式に従属する限り、そもそも思考様式自体が偽かつ劣位であり、議論される経験的な対象もまた偽かつ劣位である以上、私たちは二重に真正性を問題にすることなどできない。別様な思考を獲得するのでない限り、私たちに〈真正性〉を問題にすることは不可能なのである。

だからこそ、メルロ=ポンティは階層秩序的な二項対立的思考とは別の仕方
で思考=表現する。創造的表現は「オリジナル→コピー」のような一方向的
関係ではなく、円環的關係を形成するのである。それは「何ものか」、即ち
「表現されるべきもの」についての表現であり、確かにまだ声にもならぬ動
機とでもいうべき「漠然とした熱気」のような「表現されるべきもの」が表
現を駆り立てるのであるが、しかし決して表現に先立つものではなく、表現
によってはじめて捉えられ—或いは、捉え直され⁽¹¹⁾—、現実化する。表現
されることによって、**「表現されるべきもの」が存在したということ**
も、それが何であったのかということも理解されるのである。この「表現さ
れるべきもの」を、メルロ=ポンティは経験の「現実性の条件」(conditions
de réalité)と呼ぶ。ところで、この経験の現実性の条件は、カントの超越論
的哲学における経験の「可能性の条件」に対する批判を含意している。カ
ントの提示する経験の可能性の条件には、(認識が経験にその源泉を有してい
るにしても)経験的な認識対象を一方向的に条件づけ、構成するが故に、そ
こには「超越→経験」といった発生論的秩序を有する二項対立的思考を認
めることができるからである。しかし、既に示したように、経験の現実性の
条件は、経験以前にア・プリオリに存在するものではなく、創造的な経験
を条件づけるものの、**経験の実現によって——と同時に——発生させられる、**
そうした現実の経験と同時——つまり円環的——発生的な条件なのである。

こうしたカントとの対比からも、この経験、即ち可能的経験ならぬ現実
的経験が、創造的な経験であることは容易に理解できるだろう。つまり、
カントの示す経験が可能性の条件によって既に先取りされ約束された可能
性の閾を超出することのできない経験であり、その意味で単純に条件を適
用ないし複写した創造性が皆無の可能的経験でしかないのに対して、現
実的経験はある条件の適用や複写ではなく⁽¹²⁾、条件によって条件づけら
れる——或いは、形成される——と同時に自らの条件をも形成する——
つまり、創造的に捉え直す——経験であり、それゆえ可能性の実現では
なく現実化の即ち始まりの

経験⁽¹³⁾——始めること——であるが故に、優れて創造的であるといえるのである⁽¹⁴⁾。

2、創造的表現の主体としての身体 ——身体の力能と傾向性

とはいえ、話し手が新しい意味や思考を創造的に表現するのだとしても、既成の語彙や統辞法を用いなければならないのであるならば、何ものにも依存しない無からの創出ではない以上、やはりこうした表現もコピーでしかなく、発生論的秩序に従っているのではないかといった批判が提起されるかもしれない。だが、メルロ＝ポンティが記述＝表現しようと試みた「現象学的世界は、純粋な存在ではなく、私たちの様々な経験の交わりに、私の経験と他人の経験との交わりに、相互の連鎖を通して現れるところの意味なのである」(PP.XV)と言われるように、問題とされているのは意味であり、その創造である。つまり、「言葉は…思考の衣装ではなく、その象徴もしくは身体」(PP.212)——つまり言葉は相即不離な意味を持つということ——であるとも言われるが、そうした言葉という質料的存在を身体とする意味の創造を問題としているのである⁽¹⁵⁾。そして、表現は自らだけが従う条件としての形相的な「表現されるべきもの」によって条件づけられる限りで、創造的或いは——現実態と呼ばれても一向に構わないが——現実的と呼ばれるのであり、この意味で発生論的秩序の批判たりうるのである⁽¹⁶⁾。それ故、創造的表現の質料的側面のみを階層秩序的な二項対立的思考で捉えるならば、確かにコピーであることに違いはない。しかし、それはオリジナルのコピーではなく、オリジナルなきコピーのコピー、或いはシミュラクル——しかも真正なシミュラクルとでも言うべきもの——なのである。従って、物体の創造か流用かが問題なのではなく、たとえ物体の創造であったとしても、それが非物体的な意味の創造的表出を伴った物的創造であるならば、優れて創造的表現であると言われることになろう。だが物的側面から見ていかに創造的だと思われたものであっても、意味の創造を伴わない——つまり創造的表現ではない——表現であるなら、それは創造と呼ぶに値しない。「諸言語、すなわち既成の語彙と統辞法の諸体系、経験的に存在する諸々の「表現手段」は、

発話行為の沈積、沈殿であり、まだ言葉に表されていない意味は、この発話行為において単に外部に向かって自己を言い表す手段を得るだけではなくまたこれにおいて初めて自己自身に対する存在を獲得し、真に意味として創造されるのだ、ということができよう(PP.229)。「このような既得物から出発して、その他の真正な表現行為——作家、芸術家、哲学者のそれ——が可能となるのである」(PP.229)。

しかし、創造的表現はなぜ生まれ、何に起因しているのだろうか。「漠然とした熱気」のような「表現されるべきもの」を表現するのは誰だろうか。通常ならば、こうした創造性の原因を私たちは精神活動の内に見出し、精神こそが表現の主体だと考えるだろう。だが、メルロ=ポンティはそのように考えない。「少なくとも身体と自分で運動する能力とを備えた人間が仮にいなかったとしたら、およそ言葉も観念も存在しなかったであろう」(PP.448)と言われるように、身体こそが「この開かれた無際限の意味する力能 (puissance ouverte et indéfinie de signifier)」(PP.226)の源泉なのであり、創造的表現の担い手なのである。「私たちの身体のあらゆる使用⁽¹⁷⁾は、すでに第一次的表現 (expression primordiale) なのである。言い換えれば、それは表現されたものを、どこか別の所からその意味と使用規則とともに与えられた記号で置きかえるという二次的・派生的作業ではなく、まず記号を記号として構成し、そのうちに表現されたものを住まわせる働きなのであり、何らかの先行の規約を条件にしてではなく、記号の配置そのものとそれらの描くゲシュタルトの雄弁さによって、意味を持っていなかったものに意味を注ぎ込む働きであり、従って、その働きが生まれた瞬間に尽きてしまうどころか、一つの領野を開き、一つの秩序を創始し、一つの制度ないし伝統の土台を据える…といった働きなのである。」(PM.110-111)。

メルロ=ポンティは身体の使用に基づく創造的表現を「第一次的(原初的)表現」と呼び、既に「表現されたもの」を外部の使用規則に基づいて別の記号へと置き換えるだけの派生的な表現を「第二次的表現」(expression secondaire)⁽¹⁸⁾と呼ぶことで、両者を区別している。だが、二次的表現が身体に基づかない表現であるかと言えば、必ずしもそうではない。身体とは、先ず以って「他の一切の習慣を条件づけ、それらを了解可能なものとする原

初的習慣 (*habitude primordiale*)」(PP.107)であり、習慣の習慣とでも言うべきあらゆる習慣獲得の条件である。そして、あらゆる精神活動の基底には、この原初的習慣としての身体が位置しており、身体こそが「考える私」を基礎づけている。「考える私」が原初的なのではなく、身体こそが原初的なのであり、世界で／を生きる主体は身体的実存なのである。こうした「私は考える」(*je pense*)を基礎づける原初的習慣としての身体とは、「私はできる」(*je peux*)という力能である。私たちはまず潜勢力を持った原初的な習慣としての身体の使用を通じて、私が「できる」様々なことを習慣として獲得していく——「できる」ようになる——が、獲得された習慣に応じて私の力能も増大していく⁽¹⁹⁾。新たに制度化された身体は、新たな「できる」ことに開かれていくのである。こうして数々の習慣の獲得と蓄積とにより幾重にも制度化を果たした身体の力能は、ある「傾向性」を示すようになる。各身体は、それぞれの「記憶と習慣」によって「できる」ことに偏りがでてくるからである。それ故、画家、職人、スポーツ選手、ギタリスト、哲学者は、各身体の力能の傾向性を示しているともいえる。レオナルド、フェルメール、セザンヌ、ゴッホ、マティスもまた同様である。従って、各個人の力能は、これまでの「記憶と習慣」を通じた力能の傾向性によって区別される。各個人とはまさしくこの身体の力能が示す傾向性であり、個々人の差異とは各身体の力能の傾向性の差異であるということもできるだろう⁽²⁰⁾。その意味で、傾向性は各個に「固有の身体」(*corps propre*)の本性であるといえる。例えば、メルロ＝ポンティは「人間の身体の特性は、本性を持たないことにある」(PM.113)とも言うが、それは身体が生得的な性質を何も持っておらず、経験の中で自己の力能の行使を通して非物的な変身を遂げていくものだということである。身体は獲得した習慣によって自らの力を変化させ、その力能の傾向性こそが自らを他の身体と区別し——つまり、外的な視点から比較によって区別されるのではなく、内的な力能の傾向性それ自体が自らを他の身体と差異化し——、自らを意味づけるものとなるのであるから、少なくともその身体にとってはそうした傾向性こそ、自らの身体にのみ固有の性質を表現する本性と考えることができるであろう。従って、ここで言う身体の本性とは、身体一般に適用されうるような本性ではなく、それぞれの身体が自らを他の身体と実在的——ないし現実的——に区別するような傾向性であり、

各身体は自らを表現するこうした傾向性を自らに固有の本性として保持しているのである。

では、創造的表現と二次的表現との違いとは何か。それは、ひと言でいうならば、新たな習慣獲得の有無と関係している。両者とも身体の力能の発現ではあるものの、その仕方が異なるのである。つまり、二次的表現は制度化した身体の本性に變形をもたらすことなく身体を使用することであり、それに対して、創造的表現は身体の本性を變形することなしには表現を現実化することができないような、そうした身体の使用のことである。或いは、二次的表現は既に身体が獲得している力能の適用的表現であり、創造的表現はまだ身体が獲得してはいない力能の形成的表現であるということもできよう。例えば、思想の表現の場合、創造的表現においては、新たな思想を実現することにより、それを理解し使いこなせるようになるという新たな習慣を獲得することになる。その時、表現の実現と同時に、身体の本性に非物的な變形がもたらされる。身体は、新たな別の力能を獲得したわけである。しかし、二次的表現においては、(自分も含めた)誰かによって既に「表現されたもの」を用いて、ただ組み替えを行うだけであり、身体の本性は何ら改変を蒙ることはない。身体はただ「できる」ことを「できる」こととして行うだけであり、それは既に「できた」ことの反復でしかない。それ故、二次的表現は単なる「記憶と習慣」の秩序に従うが、創造的表現は「記憶と習慣」に従いつつもそれを破壊していくような、新たな習慣と力能の形成を伴うのである。二次的表現のような身体の可能的使用に対して、身体の現実的使用とも言うべき現実的経験は、今「できる」ことを条件に新たな「できる」ことを形成し、傾向性を変質させるそうした経験なのである。

従って、創造的表現を駆り立てるものが明確になる。それは身体の力能＝本性である。身体の力能＝本性が、「表現されるべき」何ものかを自らに提起し、それを実現するよう促すのである。無論、力能が作動しているということは、表現に先立っているということではない⁽²¹⁾。そこでは既に創造的表現が作動している——或いは作動しつつある——ということなのである。

3、真正性とは何か？

——創造的表現と二次的表現の差異

それでは、〈真正性〉とは何であろうか。「もし言葉が真正な (authentique) 言葉であるならば、それは新たな意味を立てる。…その上、今獲得された意味は、新しい意味でなければならないのである」(PP.226) と言われていることからわかるように、メルロ＝ポンティは以上で見てきた身体の意味或いは本性の変形、即ち身体に非物的変形をもたらす現実的経験こそが実は真正な経験であり、そうした経験によって表現されたものだけが〈真正〉な意味であり価値であると考え。だが、どうしてそのように考えることができるのだろうか。もう一度、創造的表現と二次的表現との差異に注目して考えてみよう。一見すると、メルロ＝ポンティは創造的表現と二次的表現とを発生論的秩序に従って区別しているようにも思える。だが、そうではない。外的な観点を取るならば、そこに発生論的秩序⁽²²⁾を見出すこともできよう——実際、「第一次的／第二次的」という形容が示していることから明白である——が、しかし、これまでの議論からもわかるように、表現の形式に注目するならば、両者には身体の本性を変形し、新たな力能の獲得を実現するような表現であるかそうではないかの違いしかない。つまり、発生論的秩序には、二次的表現しか従っていないのである。前節でも見たように、二次的表現は既に制度化した身体の力能に基づき、組み換えなどを行う表現であったが、表現する際、この力能によって示される身体の本性は二次的に表現されたものに先行し、発生論的秩序に従って表現されたものを一方向的に条件づける条件として機能する。従って、二次的表現においては、先行する身体の本性を適切に表現しているかどうかの問題となる。しかし、既に見たように、こうした関係においては、条件づけるものと条件づけられるものの双方が比較可能性を前提として成立しているが故に、表現されたものは真正性を表明することができない。また、同じ身体によって二次的に表現された複数のもの——即ち、複数の二次的表現——に対しても同様のことが言えよう。二次的表現における条件づけるものと条件づけられるもの、そして二次的に表現された複数のものは単に名目的に区別されるだけであり、そこに見出される真正性は程度の差ほどの違いでしかないのである⁽²³⁾。

それに対して、創造的表現はその現実化によって身体に新たな能力の獲得をもたらすような表現であったが、ここに発生論の秩序も階層秩序的な二項対立的思考様式も認めることができないことは既に指摘したとおりである。従って、創造的表現によって表現されたものは、それだけが従う同時発生的な変形された身体の本性——即ち、その表現されたものだけしか従うことのできないたった一つの条件——に必然的⁽²⁴⁾に条件づけられる故、「本当にそこに存するものしかそれに帰属させない」(PP.461)ような特異なものであり、比較されるべきものを持たないそれだけで〈真正〉なものであると言える⁽²⁵⁾。従って、他の身体の創造的表現によって表現されたものもすべてが〈真正〉なものであり、それらは外延量として表すことのできない〈真正性=力〉を表現している⁽²⁶⁾。それぞれの表現されたものはそれだけが従う本性のために、実在的——或いは現実的——に区別されるのであり、それぞれがまったく異なる〈真正〉なものなのである。

このように創造的に表現されたものは、身体の本性に従って実在的に区別されるものであり、二次的に表現されたものは、程度の差異でしかない以上、名目的に区別されるものであった。では、創造的表現と二次的表現はいかにして区別されるのか。最後にこの問題を再度、考えるのでなければならぬだろう。既述の通り、「表現の形式に注目するならば、両者には身体の本性を變形し、新たな能力の獲得を実現するような表現であるかそうではないかの違いしかない」。だが、こうした区別は、外的な視点を取った階層秩序的な二項対立的思考に依拠する区別ではない。ある身体による創造的表現と別の身体による創造的表現が、それぞれの身体の本性に従って——より厳密に言うならば、ある身体による創造的表現が自らの身体の本性を變形するという内的な仕方によって、他の身体の本性と差異化する限りで——実在的に区別されるように、創造的表現と二次的表現も、創造的表現が自らを内的な仕方では差異化することにより実在的に区別されるのである。従って、こうした区別は容易に果たされる。なぜなら、現実的経験の遂行と実現こそが、おのずと区別を生み出すからである。もし真正を望むのであるなら、私たちは身体を使用し、現実的経験を実践すればよい。〈真正性〉は現実的経験の行使を通じてのみ、獲得することができるのである⁽²⁷⁾。

終わりに——メルロ＝ポンティの創造的表現

このように「経験的言語と、超越論的もしくは真正な言語、それによって観念が現実存在するようになる言語とを区別した」(PP.448)。だが、最後の一つだけ指摘しておかなければならないことがある。それは、メルロ＝ポンティもまた、創造的表現を行っていたということである。メルロ＝ポンティにとって、哲学とは決して階層秩序的な二項対立的図式によって名目的に区別された「真善美」の探求ではない。「前もって存在する唯一のロゴスは世界そのものであり、これを顕わな存在たらしめる哲学は、まず最初は^レ可能的であるというのではなくて、それが属している世界と同様、最初から現実的もしくは実在的なのである」⁽²⁸⁾ (PP.XV) と言われるように、哲学もまた現実的経験なのである。それは、「バルザック、ブルースト、ヴァレリー、セザンヌ等の仕事と同様、骨の折れる仕事なのである」(PP.XVI)。

従って、メルロ＝ポンティ自身による表現もまた創造的表現であるならば、それは(真正)なものであると言えるのである。

「論文を書き始めるのに一番いい時期は、その論文を自分の思いどおりに仕上げた瞬間だ。その時までには君もはっきりと、しかも論理的に、理解し始めているからだ。いったい自分は何が本当に言いたいのか、ということ(マーク・トウェイン『ちょっと面白い話』, 大久保博編訳, 旺文社, 1988)。

付録

「真の道徳は、外的な規則に従うことに存するのでも、客観的な価値を敬うことに存するのでもない。正しくあり、救われてあるための手段というものは存在しないのだ。…むしろ…約束への忠実さ、他人への敬意、寛容さ、真面目さなどに注目するほうがいいのかもしれない。というのも、価値がそこにあるからである。価値は、私たちがたまたまそうであるところのものに自ら積極的になることのうちに、他人や私たち自身との交流、私たちの時間的構造がその機会を与えてくれているし、私たちの自由がその下書きに他ならないあの交流のうちにあるのである。」(SN. 51-52)

注

- (1) ブランド品のバッグの例で考えるならば、本物は偽物よりも時間的に先に作られており、偽物は本物を模倣して後から作られたものであるということができらるだろう。
- (2) だが、上述の「善」や「美」の問題においては、発生論的秩序など認めることはできないという批判も当然ながらあることであろう。常識的に考えて、時間的に先になされた行動が〈善〉であり、後に行われた行為が〈善〉ではないということにはならないからである。しかし、やはりこれらの問題も本質的には発生論的秩序に従っているといわなければならない。その理由については、後述することになる。
- (3) 別の観点から考えてみても、やはり真正性を捉えることは不可能である。例えば、「歴史があるということが意味するところは、まさに各人は自ら行為する中で、単に自分の名において行動しているのでも、単に自分だけを処置しているのでもなく、他人を巻き込み、他人を処置しているということであり、従って、私たちが生を受けるや否や、私たちは善き意図のアリバイを失うということである」(HT.117) とメルロ＝ポンティが言うように、行為は他へと関わることでしか自らを成就できないゆえ、まさに他へと関わる行為の本質であるならば、そうした行為の本質からして暴力ではないような無垢な善が存在しないと同様、偽物との交わりを持たない真正さもまた存在しないということになる。従って、こうした観点からも、常識的思考が理想とするような「偽物とは異なるまったく真正性」などは存在しないと断言しなければならない。
- (4) こうした規範も先に指摘した「比較可能性」の問題を逃れるものではない。即ち、行為への規範の適用ないし照合という事態がすでに類比の関係にある以上、こうした規範自体もまた比較可能性という条件のもとで成立していると考えられなければならないだろう。
- (5) 以下では便宜上、発生論的秩序のみを問題とするが、(客観的) 存在論的秩序や価値論的秩序の側面から見ても同様のことが指摘しうる。従って、「発生論的」という形容をすべて「(客観的) 存在論的」ないしは「価値論的」と言い換えることも可能である。
- (6) こうした例の一つとして、「思想」も数え上げることができるだろう。例えば、

シンポジウム「価値の『真正』性をめぐる諸問題」(福間 太田 杉本)

「モンテーニュの思想」(『エッセー』)と後続する(モンテーニュの思想の模倣なのではないかと疑われた)「パスカルの思想」(『パンセ』)などがその好例であるかもしれない。仮に『パンセ』が『エッセー』の思想的剽窃であると見做すならば、常識的な思考においてはおそらく『パンセ』に対し『エッセー』を「真」かつ「優」とすることだろう。

- (7) 極めて二項対立的思考様式に準拠した言い方を用いるならば、誰かの手によって既に表現された思考や思想を模倣したものではないという意味で、オリジナルのコピーではないということである。
- (8) ここでは、とりわけアリストテレスの議論を念頭に置いているわけではない。あらゆる神話形態に共通して見出すことができるのではないかと推測される、アナロジカルな創世神話を念頭に置いている。
- (9) つまり、二項対立的思考様式に依拠して、コピーではなく無垢なオリジナルを産出するが故に創造的であると言われるわけではない。
- (10) だが、創造的表現を極めて常識的な階層秩序的二項対立的思考で人々が捉えるとき、そこに発生論的な「真」と「優」を見出すことになるのである。
- (11) 例えば、「一つの構造を経験するということは、受動的にそれをそのまま受け取ることではなくて、それを生き、捉え直し、引き受け、その内在的な意味を再発見することである。それ故、経験は事実的な条件に、原因に対するように結び付けられることはできない」(PP.299)とされていることに注意しなければならない。
- (12) 同様に、「神による創造」のような無条件の創造でもないことは指摘しておかなければならない。
- (13) 例えばメルロ＝ポンティは「始まり」について、「哲学とは己に固有の始まりの繰り返される経験(*une expérience renouvelée de son propre commencement*)であり、哲学のすべてはこの始まりを記述することにある」(PP. IX)と記述＝表現している。無論、こうした「己に固有の始まり」も現実的経験に他ならない。
- (14) だが、こうした現実的経験が示す創造性——即ち(真正性)——が、「オリジナル／コピー」のような思考様式の内にも認めることができる創造性と同様の意味において語られうるものでないことは指摘しておかなければならない。その理由は、後述に譲る。
- (15) こうした言葉と意味との表裏一体性は、前節で引用した「語るということが考えること」の言い換えでもある。言葉と意味は相即不離なものであり、その

意味で両者は一つのもの二つの側面なのである。

- (16) この意味で、「理念の現実存在は表現手段の経験的存在と混同されてはならない」(PP.447) のである。
- (17) こうした「身体の使用」という言い方は、精神が身体を使用するということを意味するものではない。むしろ、身体による実践という意味合いが強い。つまり、身体による身体の実践的行使であると考えると分かりやすいだろう。
- (18) 上記引用文中に見られる「明白になっている思考の翻訳」は、まさしく二次的表現である。
- (19) 「習慣とは、われわれの「世界への存在」を膨張させるわれわれの能力 (pouvoir)、あるいは新しい器具を己に添加することによって実存を変える我々の能力の表現である」(PP.168)。
- (20) 従って、メルロ＝ポンティによる「私はできる」という身体の力能の記述＝表現とは、「私は考える」というデカルトのコギトに抗して、「できる」限りにおける——即ち力能である限りにおける——「私」としての身体の現実性の肯定であり、つまり、何かをできる限りにおいて、或いは何らかの習慣を獲得している限りにおいて、現実的に特異な個々の身体でありうることの記述＝表現であるということもできるだろう。
- (21) 換言するならば、創造的表現は身体の力能によって駆り立てられるものであるが、しかし、これは先に見た現実的経験と同様、発生論的な一方向的関係にあるのではなく、表現を通じて身体の本性が円環的かつ創造的に変形されるということである。
- (22) ここでは便宜上、発生論的秩序のみを強調しているが、しかし、二次的表現には言うまでもなく階層秩序的な二項対立図式を読みとることができるのであり、また三つの秩序のすべてを認めることができる。
- (23) 従って、二次的表現においては「どちらが真正性であるか」等といった、正当性の争いが生じることにもなる。しかし、後述からもわかるように、創造的表現においては、そうした争いが生じることはないのである。
- (24) 創造的表現において、条件づけられるものは自らを条件づけるものによってのみ条件づけられることで唯一の表現を現実化する故、条件と条件づけられるものとの間には、必然的な関係を認めることができる。それに対して、二次的表現においては、条件によって条件づけられたものが常に同じ表現であるとは限らず、時には真正 (に限りなく近いもの) の表現であったり、時には出来の悪い表現であったりするため、条件と条件づけられるものとの間には常に偶然的

な関係しか認めることができない。

- (25) ちなみにこうした〈真正〉なものは、事実としても価値としても「オリジナル／コピー」の関係と決して相容れるものでないことは指摘しておかなければならない。例えば、「オリジナル／コピー」の複写関係においては、事実的にも価値的にも「似ている」わけであるが、創造的表現においては、「表現されるべきもの」と「表現されたもの」は、全く似ていない。メルロ＝ポンティによれば、「表現されたもの」は「表現されたものではないもの」、即ちある意味で表現されたものを否定するもの——「自分に反するもの」(EP.59)——と円環的に関係し、円環的な依存関係にあるということになる。この関係は、「見えるもの」と「見えないもの」との、言葉と意味との関係と同様である。例えば、「哲学とは表現することであってみれば、表現されるものとの合致を放棄し、表現されるものの意味を見るがためにそれを己から遠ざけることによってのみ、自己を完成するわけです」(EP.59)と言われていることにも注意しなければならないだろう。
- (26) ここでは深入りすることを避けるが、創造的表現によって表現されたものは、身体の力能＝本性と同じだけのある強度の、即ちあるスタイルの表現なのである。
- (27) 本論では議論の都合上、個々の身体の創造的表現によって表現された「特異なもの」が〈真正〉なものであるとだけ論じたが、こうした「特異なもの」は別の身体によって理解されうるものであることも指摘しておかなくてはならないだろう。例えば、「前後」はいかなる身体にとっても「前後」であるように、原初的身体の力能は各身体に共通しているが故、「特異なもの」もまた他の身体によって（表現できるかどうかはさておき）理解されうるのである。こうした非人称の一般的な身体を私たちは共有しているが故に、相互身体性は成立する。それ故、個々の表現の特異性は、すぐさま普遍性の地位を獲得することになるだろう。こうした議論として、例えばメルロ＝ポンティが、「われわれが普遍的なもの(l' universel)に達するのは、己の特殊性(個別性、particularité)を捨てることによってではなく、己の特殊性を他の特殊性に達する手段とすることによってなのであり、さまざまな状況を互いに理解しあえるように仕向けるあの不思議な親和力によってなのである」(SN.113)と言っていることに注目して欲しい。また、「私たちの経験には他人の内へと移行していく奇妙な力があるということが確かめられるのも、したがってまた、私たちが全く放棄することも、完全に近づくこともできない——とパスカルが言っていた——真理が基礎

シンポジウム「価値の『真正』性をめぐる諸問題」(福間 太田 杉本)

を置いているのも、私たちの差異そのもの、私たちの経験の単独性(特異性)の内になのである」(SN.114)と言っていることにも注意が必要だろう。

- (28) ここでも指摘しておかなければならないが、「前もって先在しているロゴス」は文字通り表現に先立って在るわけではない。それは表現によって同時発生的に捉え直されるのである。

参考文献

本文中でメルロ＝ポンティの著作から文章を引用した際は、以下の通り出典を略記した。

- [EP] *Éloge de la Philosophie*, Gallimard, 1953
〔翻訳〕メルロ＝ポンティ『眼と精神』, 滝浦静雄・木田元訳, みすず書房, 1966年.
- [HT] *Humanisme et terreur*, Gallimard, 1947
〔翻訳〕メルロ＝ポンティ『ヒューマニズムとテロル』, 森本和夫訳, 現代思想社, 1965年.
- [PM] *La prose du monde*, Gallimard, 1969
〔翻訳〕メルロ＝ポンティ『世界の散文』, 滝浦静雄・木田元訳, みすず書房, 1979年.
- [PP] *Phénoménologie de la perception*, Gallimard, 1945
〔翻訳〕メルロ＝ポンティ『知覚の現象学』, 中島盛夫訳, 法政大学出版社, 1982年.
- [SN] *Sens et non-sens*, Gallimard, 1948.
〔翻訳〕メルロ＝ポンティ『意味と無意味』, 滝浦静雄他訳, みすず書房, 1983年.